

## 考察用・福留利光氏の中国従軍日記

青字が本文、薄青字が娘・光子に確認して訂正したもの。朱字は考察者の強調や疑問。囲み字は補足や考察。

南九州市穎娃町御領上石垣福留集落出身。「生育歴から始まり、1944年召集(20歳)、熊本第六師團、輜重隊に入隊。翌年21歳(1945年)で再度召集、熊本山砲聯隊に入隊、満洲から中国南部の汕頭(スワトウ)まで列車や船で移動した経験」の帰還後の日記。1997年に74歳で死去。古い机の抽斗から娘・光子(65)が発見、B5版、19頁

昭和5年 小学校入学昭和12年 小学校卒業

昭和12年 大阪に就職

昭和14年 退職

昭和16年 飯塚の炭坑に行く

昭和17年 退職、その後、義兄と土方並びに鍛冶、飯場暮らし。

そのうち、徴兵検査、第一乙種(ネット 甲種合格の目安は身長152センチ以上・身体頑健。「乙種第一」=甲種を外れても健康で現役志願の抽選に当たった者)。甲種でなかったのが残念であったが、今、思えば何でもないことである。敗戦のためであろうか、土方をやめて、義兄の家で鍛冶をやる。

1 昭和十九年三月、一回目の召集令が来る。2 熊本第六師團、3 輜重隊に入隊。その間、一ヶ月の教育。普通は三ヶ月であるが、戦争が激しくなったので、三ヶ月間も教育しておれなかったとかで入隊した。午前中は普通の生活であったが、午後からは、4 軍隊独特のビンタが飛び出す。日が経つにつれ 段々と厳しくなる。どの初年兵も顔が逆三角になって来る。時には、顎が外れる人もいる。初めて見た。癖になるらしい。殴られる時には「歯をくいしばれ」と言われる。そうしなければ、外れる。部隊長の訓示で、逃亡又は自殺などをしてないように言ったが、他の中隊で、自殺者が出た。何でも便所で死んだらしい。自殺者が一番多いという。逃亡者は少なくないらしい。六師團は昔から日本一と言われる。軍隊教育の烈しい所と言われて、それなりに戦も強かったと言われている。

四月、招集解除。感想—5「初年兵にとっては、ただ地獄」、「古参兵は極楽」と言う人もおるとか。

### 考察

- ◎ これは当時の召集先での日記ではなく、戦後、帰還してから思い出して書いたもの。その書いた月日は不詳。記憶と描写の相互関係は精査と配慮が必要である。
- ◎ 徴兵検査が甲種合格(目安は身長152センチ以上・身体頑健)ではなくて、乙種第一(甲種を外れ、健康で現役志願の抽選に当たったもの)であるから体格が少し劣っていたものか。志願しているようではない。
  - 1 1944年3月20歳で1回目の召集。1942年の3月にはフィリピン統一抗日戦線(フク団)が結成、4月18日には東京初空襲、6月5日にはミッドウェー海戦で空母4隻、艦載機390機を失う大敗、1943年5月12日アッツ島全滅で「玉砕」の語の使用が始まり、サイパン玉砕、1944年は6月15日サイパン玉砕、6月16日北九州の初空襲、6月19日マリアナ海戦で空母3隻、搭載機400機を失い、日本軍は1942年7月フィリピン全土占領を最後に、攻勢から守勢、玉砕、撤退が続く。そんな中での召集である。
  - 2 第6師團は、明治5年(1872)に設置された熊本鎮台を母体に明治21年(1888)5月14日に編成された師團。熊本第6師團は熊本・大分・宮崎・鹿児島九州南部出身の兵隊で編成され衛戍地を熊本とする師團。東京の近衛師團の三つの師團と全国に355の師團があった。

- 3 兵站を担当するのが**輜重(しちょう) 水食料・武器弾薬・各種資材**など様々な物資を第一線部隊に輸送して、**同部隊の戦闘力を維持増進することが主任務**であり、貨物自動車(トラック)などの大型車両を保有するが、後方任務に限定されていたので武装は比較的軽装備。明治6年3月に輜重兵の編成が開始。明治10年の西南戦争においては役夫を民間から組織。
- 4 **軍隊=暴力**、というイメージ、上官から、古参兵から。悪い意味で「体で覚えさせる」、表現は「殴打」「どやされる」「ビンタ」「気合を入れる」など。結果として「顎が外れる」「顔が逆三角形」「自殺」「逃亡」があったりする。日本軍の戦争記録には、戦友・古参兵・初年兵・ビンタなどの用語がよく出てくる。そこには「暴力」というのもよく出てくる。常態化していた様子が見える。
- 5 最初の召集の感想、この表現は暴力のことを指している。

6 **臨時召集補充兵**として二十年一月十三日 二回目の召集。**熊本山砲連隊**に入隊。防寒服と兵器、その他、カンパン、カツオ節等を貰う。三、四回、7 **予防注射(接種)**。8 **門司から釜山へ**。釜山の町で、スルメ等を買いきむ。時々、スルメをちぎって食べる。釜山の港にニンジンか陸上げされてあったので食べたが、9:**中は氷で味もなかった。川も凍りついてた。**

列車に乗せられ 10 **満洲へ**。汽車が奉天に着くまで一回、**馬番**についたが、馬六頭を見なければならぬ。勤務時間は忘れたが、一時間か二時間であったであろう。**その時の冷たいのが、今でも忘れられない。防寒靴下と軍足三枚を履いていたのに貨車の中で足踏みをしなければならなかった。**

## 考察

- ◎ **1944年の3月に1回目**の召集で入隊し、4月に召集解除、その間、わずか1か月程度。
- ◎ 翌年の早々、**1945年1月13日**に**第2回目**の召集、前年の1か月の訓練とは、一体、どんな意味だったのだろうか？ 召集時の**輜重隊**と**山砲隊**の違いも不可解、日本軍の泥縄的無計画性が見えるようだ。予防注射が3-4回とは伝染病が相当なものであったことが想像される。門司から真冬の釜山へ、寒さが厳しい様子。
- 6 別に、——昭和十八年(1943)十月一日、「午前十時までに、旭川市北部第五部隊に参着すべし」の『**臨時召集令状**』を受け、第二**補充兵**陸軍騎兵として召集された。水谷甚四郎 大正二年十一月四日生(九十歳) 臨時 召集されて北朝鮮へ(編集・発行 上富良野町郷土をさぐる会)——という記録がある。文字通りの役目で、すでに**1943年**から**臨時召集補充兵**があったことが分かる。この時、筆者は熊本**山砲隊**に入隊し、記録の中心「大陸方面に移動」した。**山砲**は同口径の野砲と比べて軽量・小型かつ分解が可能で、砲口直径(口径)に対する砲身長(口径長)が短く、低初速・短射程。文字通り**山岳地帯**や**不整地**など、通常の**野砲**が行動力を発揮できない地形で**軽快な機動**を行うことができる。、**分解して駄載・車載する他、人力でも搬送が可能**。野砲に比べて**低初速・短射程**である。**山砲**は砲兵・歩兵ともに扱いやすく、**ほぼ全ての戦線に投入され効果的に使用されている**。**カツオ節**や**カンパン**は貯蔵の危機食糧、カンパンは軍隊特有で分かるが、**カツオ節はどうして？**
- 7 何の予防接種か不明だが、引揚者に腸チフスやパラチフスや赤痢が多かった記録をよく目にする。
- 8 「門司→(船)→釜山→(列車)→奉天」、このコースは日本から満州・中国への定番コースのようだ。
- 9 馬当番は列車の中のことだろうが、その寒さに対して人間に比べ耐性の強さを感じる。釜山の寒さについては、**リマン海流**のためで、間宮海峡付近からユーラシア大陸に沿って日本海を南下する海流(寒流)。日本海を北上する暖流の対馬海流が北上するにつれて冷やされ、アムール川の淡水と混ざり、南下するようになったものであるとされているが、流量が少なく観測データも乏しい為、形成過程については諸説ある。「**リマン**」とは**ロシア語で大河の河口(三角江)を意味する**が、この「大河」はアムール川を指す。樺太(サハリン)の南西から沿海州に沿うようにして進む、朝鮮半島の北東(北緯40度あたり)までの海流である。朝鮮半島に

当たったりマン海流は朝鮮半島に沿って冷海水として南下する（北鮮海流）。蔚山（ウルサン。釜山のすぐ北）付近の海岸では夏でも普通の人には非常に冷たく感じ、海水浴が難しい。ニシン・タラ・サケ・マス・サンマなどの寒海性魚類に富んでいる。

夜、奉天に着いた。初めて列車をおりて、10 飯盒洗いに出た。飯盒が手にベタベタとつく。気温は大分下がっていたのであらう。風はなく、空気が重く、静かに、のしかかる感しで寒いとは余り思わなかった。ここが満州かと思った。私達は 11 防寒服を渡されたので、皆、満州行きとっていたが、汽車は、いつまでも我々を降ろす気配がない。時には、外の様子は、全然、見えないようにしたりしながら汽車は走り続ける。我々は、12 大概の人が時計を持っていないので、時間の観念が全くなかった。どこを、どう走っているのか分らないが、中国の風景が窓越しに見えるので、珍しくて、退屈はしなかった。我々は、時々、隠れてカンパン、カツヲ節等を食った。時には食ったのを下士官に見つかり、13 ビンタをはられた。古参兵等は「お前等、食べ方の要領が悪い」と言う。古参兵は自分の物は食わずに、初年兵に、それとなく要求してくる。今日は何日か、という日々も分らなくなってきた。

## 考察

- 10 飯盒という言葉、軍隊用の飯盒は、片面のほうが曲がっていて体に括りつけて携行する時、フィットするようにできている。私も持っていて在職中のキャンプ生活には必ず持参して飯炊きに使った。「盒」の字を知らなかったが確認できた。日記では当て字で書いてあった。気温が低いとき冷えた金属に手がくっつくさまが「手にベタベタと」とうまく表現してある。出水は「風の寒さ」「大口は深々とした低温の寒さ」、満州は大口型の寒さの表現である。
- 11 防寒靴下とか防寒着というのが出てきて、軍隊で大陸の寒さ対応がなされている。
- 12 時刻にうるさい軍隊なのに兵隊は大概時計を持っていないのだ。古今東西の軍隊では、起床から就寝に至るまで喇叭兵が吹奏する喇叭（ラッパ）の音色（喇叭譜）をもってこれらの時間を将兵に伝えており（日課号音）。「日時が分からなくなった」は当然か。「外の景色が見えないように走ったり」とか「窓越しに中国の景色が見えるので」などの矛盾したような表現、秘密にしたい場所を通過する時は遮蔽でもしたのだろうか？
- 13 「ビンタをはられた」「古参兵」という軍隊の定番用語が出てきた。ビンタは、想像するに首から上の前面を殴打されることの表現、巧妙な軍隊経験者「古参兵」、対応語が「初年兵」、殴打という暴力で軍隊になじませていく方法が常態となっていた感じがする。

突然、14「万里長城」と言うので、外を見ると右側の山の上に、絵等でよく見る風景が見える。山開闢という所だと言う。時々、体が痒くなる。召集されてから、15 風呂にはおろか体も拭いたこともない。シラミがわいてきた。軍隊にシラミは、つきものである。列車内では、16 兵器の手入等、やかましく言われる。一日、何回か軍隊教育がある。相変わらず上官の目を盗んで隠れ食いをする。段々、大胆になって来た。私は中国の景色を見ながら旅行気分である。（時々、その気分であった）。木はあまり生えてはおらず、冷え冷えとした所である。そんな中に泥で囲った民家が、ひと固まりになって、所々、牛の糞を家の周りに付けている。燃料にするという。

## 考察

- 14 鉄道から万里の長城が見えるのは山海関付近と思われるから、奉天（現在の名シェンヤン瀋陽）からチンチョウ（錦州）を経てシャンハイコワン（山海関）という鉄道コースで移動させられているようだ。当時の日本でも絵や写真で万里の長城は知られていたようである。

- 15 1945年1月13日に召集され「門司→釜山→奉天→山海関」と移動している。日程は不明だが、相当、長い距離と日にちの間、風呂にも入らず体も拭いていないとは！ 真冬とはいえ痒くなるのは当然だろう。シラミがわいてきたというから痒みはそのせいもある。明治時代の日本の東北を旅行し『日本奥地紀行』を書いたイギリス人イザベラ・バード女史はシラミとのノミと蚊に悩まされた状況がよく出てくる。「軍隊にシラミはつきもの」というが、民間でもつきものだったし、私は昭和11年生だが小中学校時代の昭和20年代に、ノミとシラミを経験している。ノミが中心、妹の髪にはアタマジラミ？なるものがいて、それを梳いて捕る「梳き櫛」があったのを覚えている。今は蚊以外は駆除されているので隔世の感がある。
- 16 「軍隊教育」が具体的に書いてないのは惜しい。「隠れ食い」以外にも「食」はよく出てくる。応召兵隊は常に空腹に悩まされていたことは事実のようだ。車外の中国景色の観察は的確で面白い。風景は華北の畑作地帯の描写である。

夜になって、大きな街に着いた。汽車は大分、長く止まっている。今まで、こんなに長く止まったことがないので、我々は、ここで降りるのかと思っただが、古参兵が「各自の装具の点検をして置け」と言い、古参兵は「この街は17 済南」と言った。ここで降りるかと思っただが曖昧であった。外を見ると、大分、賑やかな感じであった。

中国独特の服装が目につく。18 綺麗なクーニヤンや、上と下が繋がった中国服の男の人が、いかにも街の人といった感じであった。今まで通った所でも、多少は、こんな人達がおっただろうが、町が小さいのと農村地帯で華やかな感じはなかった。この地の町で19 初めて米の飯を食った。汽車は、又、走り出した。

#### 考察

- 17 奉天からの汽車のコースは、「奉天（フーシュン瀋陽）→錦秋（チンチョウ）→天津（テンチン）→德州（トーチョー）→済南（チーナン）」のように思える。
- 18 21歳の若い男性、クーニヤンに持つイメージもあったことだろう。つなぎの服が「街の人」とは、ぴんと来ないが労働者の意だろうか。
- 19 「門司→釜山→奉天→済南」の長いコースに、コメではない何を食べさせられていたのだろうか？ 『軍隊調理法』に出てくる料理はかなり豪華で充実しているが、日本軍が退却になったこの頃は兵站も逼迫し、まして鉄道で外地を移動する臨時召集兵達にまともな食事は出なかったのであろう。

何日、何時間、走たのか分からないが、ある日の夕方、20 浦江に着いた。揚子江から見える対岸は南京である。ここから舟に乗るのである。21 川でなく海という感じで浪が立っている。対岸まで二キロぐらいあると思っただ（濁っている）。黄河はいつ渡ったか、分からないから夜だったのであろう。揚子江は、橋を架けられないかも知れない。22 南京の灯が大都会という感じで見える。舟から渡り、夕暮れの街を横目で見ながら、宿舎に向かって進む。南京に一日、二日おっただように思う。ここで慰問袋を貰った。中には、励ましの手紙や数珠玉、針・糸等が入っていた。手玉が五、六個あったので、これで遊ぶわけにもいけないので、戦友たちに見せたら、古参兵が一つ破って中を取り出したら、煎り大豆であった。古参兵等と別けて食ったりした。我々は、どこに行かされるのか、さっぱり分からない。ここに落ち着く様子もない。ただ、22 兵器の手入れやシラミ捕りをするだけで、洗濯をした覚えがない。

#### 考察

- 20 済南からは経路が分からないが南下して揚子江の南京付近に着いている。淀山湖からの黄浦江川が揚子江河口南岸の上海に流れる。浦江は地図にないが対岸は南京という表現から揚子江を挟んで南が南京、その北

側が浦江だろうか。

- 21 揚子江は南京あたりで「2km」ぐらいの広さ、濁った揚子江。黄河は夜に渡って見ていないから比較表現がないのは残念。ここから舟で渡り、南側の南京の町へ行き、宿舎で慰問袋を受け取っている。手紙・数珠玉・針・糸・お手玉などが入っていた。お手玉の中が煎り大豆だったのは家族の食への思いやりだったのだろうか。慰問袋が届かなかったらしい古参兵が、お手玉を取り上げて破いたような感触だ。千人針は入ってなかったようである。私は千人針を喜界町の民俗資料館で初めて見た。
- 22 移動の列車では兵器の手入れとシラミ捕り。無計画さが感じられる。

又、気車に乗せられ、上海に行くとの噂が出た。23 南京から上海までの間は田圃ばかり、一望千里という思いであった。途中、24 蘇州夜曲のお寺を見た。鉄道近くにある。付近は田圃ばかりで松等があり、池もあるらしく、綺麗な太鼓橋らしい橋も見えた。田圃の中のお寺という感じである。25 上海に着く。宿舎は高等学校であった。四、五階建てであったように思う。机や椅子はなく、ただ教壇だけが残されていた。上海に十日か、二十日ぐらいおったように思う。毎日、26 何をしたか忘れた。全部が夢をたどって書くようなものである。ただ、上海は洋式の建物が多い所、我々がいる所は 27 港湾 (キャワソ) という所であった。近くに印度大使館らしい建物があり、頭にターバンを巻き、色の黒い目のギョロツとした、背の高い兵隊が守っているのが印象的であった。

- 23 私も「南京→上海」を列車で移動した経験がある。田んぼばかり、二階家が多かったことを記憶している。中国の水田地帯。
- 24 『蘇州夜曲』は、李 香蘭主演による昭和 15 年 (1940) の映画「支那の夜」劇中歌。蘇州夜曲の歌詞の中に、「鐘が鳴ります、寒山寺」と言う部分があるが、日本人にとって、蘇州で最も馴染み深い場所がこの寒山寺。寒山寺は、「南京→上海」鉄道コースの上海の手前にある蘇州市の西の郊外、中国江蘇省蘇州市姑蘇区にある臨濟宗の仏教寺院。虎丘のそばにある。蘇州の旧市街から西に約 5km、蘇州駅南南西 3km。今でも大晦日には、ここを訪れて除夜の鐘を聞きながら、年越しをする日本人観光客も多い。阪急交通公社のツアー。鹿児島→(AP)→上海→(バス)→杭州→(列車)→蘇州→(バス)→無錫→(列車)→上海→(AP)→鹿児島。11月23日(日)ホテルの朝、6:40 で 26℃、昨夜から一定だ。夜明けとともにスケッチを始めたが、なにしろ、ひどい霧、正面限界上の 4 階の部屋で中国風屋根が下に見えるのだが霞んでいる。結局、出発間際まで描いても未完、色付けもできず。7:00、出発、昨日からの中型バス。バスの中は 15℃ (9:15)。ガイド「本日は寒山寺→虎丘→市内観光の博物館、絹・刺繍店など廻ります」。そしてバスは無錫まで行くという。日本の歌が中国で人気があり、「飛鳥が来た時は、入場料 300 元だったが友人は上海まで聴きに行った。300 元は半月分のサラリーマンの収入です」という。以下、ガイドの話が中心。寒山寺の「寒山」は僧の名で「寒い」とは関係がない。「詩で有名、除夜の鐘を聞きに、日本から、昨年 800 余人の人が来た。1980 年代 (1987 年?) には 2000 名余の人が来たという。しかし、鐘を撞くことは除夜にはできない。今日は撞ける。普通は三つ撞くが、それは一つ目が福、二つ目が禄 (金運)、三つ目が寿で、「福・禄・寿」の意と、一つ撞くごとに 10 歳若がるとも言われる。寒山寺 10℃ (9:40)。我々も並んで鐘楼に上り、写真を撮りつつ、撞いた。長蛇の列は、すべて日本人、写真を撮るのに時間がかかるわけだ。大きいというほどの鐘ではないが澄んだ音色だ。鐘楼の前で 13℃ (10:00)。例の詩が門の内側にも中の石碑にも書いてある。この詩で有名になった張継は科挙試験に 3 回も落ちて、帰る途中、舟の中で、この鐘の音を聴いて、あの詩を作ったという。詩はうまかったが文章は下手で科挙に落ちたとか。そのため後世に名を残すことはなかった。南北朝、梁の天盤年間 (502~519) に創建された寒山寺は唐代に寒山と拾得という高僧が住んだことから、その名がある。鐘は明治時代の 1905 年に日本から。寒山寺を 10:15 に発ち、10:25 虎丘に着く。虎の形をした丘の地形から、

その名がある。海湧山の名があるように平坦地に目立つ丘になっているらしい。福留利光氏は21歳で蘇州夜曲や館山寺を知っている。1940年の映画の歌で、以後、日本で流行ったので彼もよく知っていたか？

25 高等学校も日本の侵略で閉鎖されていたか、生徒も安全な地区へ移動していたのか。

26 このような表現が何か所にあるが、後年書かれた証拠である。あいまいな部分や省略もあるのであろう。

27 港湾というのは特定の地名ではなくて後湾設備が中心の意味のようであるが、中国語のキャワンの意味は単に日本語の「港湾」なのだろうか。インド大使館があるような場所であるが。「ターバン・色の黒い・背の高い」という表現のインド兵を初めて見た印象だ。——ネット情報では中国の場合、長江、黄河、珠江などをはじめとする主要な河川、その支流、運河に多くの内河港が発達してきた。海に直接面している大きな港は他国以上に少なかった。近代に欧米列強が開港をせまり開港場となった港湾には、これらの内河港の他に直接海に面した海港が登場した。そこに欧米列強の租界が設置され、欧米列強の中国進出侵略の拠点としてのケートウェイ港湾として発展した。(陣内秀信『世界の港町に関する発展・衰退再生のメカニズム比較』)——。市街地は、長江の支流である黄浦江を遡ったところにある。黄浦江の河口は呉淞口と称した港。2012年6月時点の上海市の常住人口は2,400万人を超え。アヘン戦争を終結させた1842年の南京条約により、上海は条約港として開港した。これを契機としてイギリスやフランス、アメリカ合衆国などの上海租界が形成され、日本も租界を開き、虹口区は「小東京」と呼ばれた。戦前から多くの日本人が住む上海には2015年現在、9,962社の日系企業が進出、46,115人の日本人が住み、海外で3か月以上留まって暮らす長期滞在の日本人が多い都市として、タイのバンコクに次ぎ、2番目となっている。]短期滞在者を含めると10万人以上の日本人が滞在しているといわれる。神戸港および大阪港と上海を結ぶフェリー「新鑑真号」と大阪港と上海を結ぶ「蘇州号」が就航中。2005年には、山口県下関市と上海を結ぶフェリーが就航(2006年に中国側寄港地は蘇州太倉港に変更)。現在、中華民国は国交のある15カ国全てに大使館を設置。事実上、大使館にあたる代表処を持つ国は多く、インドもある。——ネット租界とは、清国(のちに中華民国)内の外国人居留地である。阿片戦争後の1840年代以降、不平等条約により中国大陸各地の条約港に設けられた。行政自治権や治外法権をもつ——。

私は出征の時、28 同じ村内の松窪という人と一緒に中隊も同じであった。他にも同じ村で二人いたので、私を含んで四人いたが、大隊は同でも中隊が別であったので、その二人はあまり知らない。ある時、松窪と二人で上海の街を歩いていると、饅頭等を並べて賣っている店があった。29 内地では甘い物等、仲々、口に出来ない時代であったので、一皿づつ注文して食った。普通の大きさの饅頭が六つあった。値段は六百元という。私達も、これには驚いた。内地を出るとき十円持って来た。中国に入った時、金の変遷があった。十円が、確か三百円であったように思う。内地では十円は大金であった。金は足らないので、私達は30 食い逃げするしかなかった。「茶を持って来い」と言って、取りに行った間に逃げた。店の人が後に見えた時には三十米ぐらい、離れておった。私達は走っては逃げない。急ぎ足で逃げなければ目立つので、もし他の兵隊(上官)見つかたらひどい目にあうから、店の人が見えたので、急に、ほかの露地を曲り曲りして逃げ延びた。金の値打ちのないのに驚いた。31 今の日本と同じある。

## 考察

28 召集兵は同じ村や地区がよくあったようで、その地区の名で隊が呼ばれていたことが書かれた日記類を見たこともある。意図的にそのような隊を作ったのかもしれない。出てくる著者の「福留」や「松窪」という生徒が穎娃高校時代にいた。桂島キャンプ10名の中にいた福元はその一人で、今でも繋がっており、彼女に頼んで日記のコピーを貰ったのである。

29 彼が召集されたのは1945年1月、終戦の年の8か月前である。年表でもわかるように、早くも1942年の

3 月頃から守勢と撤退、連合軍の攻勢を受けて、戦地は玉砕続き、内地では句集続き、食料も逼迫、自由に食べる甘いものなどなかった。日本の 10 円が中国の 300 円のレート、30 倍。饅頭 1 個が 100 円、この饅頭の値段は、どう解釈すればいいか、日本人とみて吹っ掛けられたのだろうか。10 円は大金という感覚、1944 年と 2021 年の適切な換算を知りたい。私の終戦後の小学生のころの経験では芋飴が 10 円で 10 個買った記憶。

30 「食い逃げ」的なことは戦前の日本の兵隊にはよくあったようである。この後にも「飯盒の盗り合い」が出てくる。戦争末期には兵站（補給、整備、輸送など）が不十分で現地調達という名での略奪が多かった。

31 この日記は、戦後、インフレの時代に書いたものか。

上海の港での 32 梱包監視に行く。広い岸壁に幾つもシートで囲った山がある。色々な物品があるという。食料もある。梱包してあるので手を突っ込んで取る事が出来ない。我々は兵長以下五名で六つの山を巡回して監視した。兵長はシートの中に潜り込み缶詰を取って来た。みんなに一個づつ分けた。33 牛肉の缶詰である。我々は要領よく巡廻しながら食べた。みんな腹が減って食うことだけしか考えないので、牛肉は内地でも余り手が出ない物であったから有難かった。軍隊は辛い、内地では口に出来なかった物が、少ないが色々口に入る。だが監視とは品物を盗まれないためにある。盗人に監視させているようなものである。34 兵長が言うには「中の品を取っても箱だけ残せばよい」と。とにかく「空箱でも数が揃えばよい」と言うのである。兵長は、時々、シートの中に潜り込む。私も一緒に潜った。帯剣で、こじ開けて取る。皆も、それぞれ三個か四個ずつ取った。あとは元通りに直した。カンパンもあったが鍼力（T・しんりき？ 鍼は針治療も意。誤字なのか、「嚴重な梱包」の意味のようだが？不詳）の箱で取れない。こんな訳で梱包が 35 前線へ着いた時に、中は少なくなっているのだという。それは、特に食料品等が多いらしい。前線におる者が馬鹿を見る。（T・後方援軍の輜重状況が、この状態の日本軍の全体像は推して知るべし！）。

## 考察

33 このような仕事は輜重兵の役目、彼等は山砲隊として召集されているが、目的地にまだ到着していないから本来の役目がないのであろう。

33 牛肉缶詰の価値。内地では節約の限りをして戦地へ送っていた状況が分かる。常時、空腹状態。

34 箱を残す、箱の数が揃えばいい、という形式論、日本軍国主義の実態を示す一つの言葉。

35 前線の兵隊を思いつつ、盗み食いをしなければならないほど飢えた状態だったか。

港に大きな倉庫がある。その 36 便所に行ったが、中は糞が山盛になっていた。どの便所も同じである。寒いので盛り上がる事が出来たのであろう（T・上海では便が凍るほどの寒さだったのか）。私はしゃがむことが出来ない、仕方なく戻って、近くの小さな草藪で用を足した。

私達は小人数で、度々、外出した。何のため、何の目的で出たか忘れたが どこへ向かっても珍しく見える。大きな舗装道路を、37 白人や、時には黒いのやら、（T・この表現には当時の日本の認識が判る）。中国の兵隊か警官か分からないが、色々な人種が行き合っている。—「高いビルが建ち並んだ所から、少しはなれた所等には、薄よごれた家が建ち並び、その前には、また、薄汚れた人々が、うろうろしてビル街とは、又、違った珍しさがある。—」（T・緑字の部分は四角で囲って大きく×印が書いてある。つまり削除） 邦人や將校等は何となく威張ったような感じがして、余り好感は持てなかった。私達の引率者は、將校が来ると、「又、馬鹿が来やがる」と言う。敬礼がうるさいからである。そんな訳で、なるべく裏道に行く。我々は兵舎においても、38 演習もしたことはなかった。ただ、目的もなく動（うご）いているだけのように見えた。門司港から船に馬や車両砲等を積み込むのを見たのに、我々は汽車の中で馬当番についただけで、その後、それ等は見た事もなかった。

## 考察

- 36 上海は、鹿児島とほぼ同じ緯度にあるが、鹿児島より寒暑の差は大きいと解説される。大陸にくっついていからだろう。北海道のかつての冬の便所は盛り上がり尖っているので「いきなりしゃがむとケガをするから金づちが置いてあり、叩いて崩してから用を足す」旨の記録を読んだことがある。鹿児島ではそのような寒さはなかったと思う。
- 37 国際都市上海は各種の人類が活躍していたことが分かる。黒人を「黒いのやら」と差別用語的感触がある。住んでいる日本人も、軍隊の将校も威張った態度で接していたことのように、日本でもロシア人を「ロスケ」とか中国人は「チャンコロ」という差別語が普通に使われていた。戦前の少年の頃「首をちゃんと切れば、ころっと転がるから」という説明を聞いた。南京虐殺を思い出すまでもなく中国人の命を軽視した風潮が日本にはあった。外出時の引率者は古参兵の先輩であつたらしく「敬礼を求める将校」を馬鹿にしている様が面白い。
- 38 山砲隊で召集され、上海まで送られてくる間に、本来の訓練をせず、うろついているだけの日々である。

宿舎から少し離れた所に **39 馬糧倉庫**があつた。ある夕方、私達二、三人は、そこに忍び込み「とうもろこし」と岩塩を盗み、出ようとした時に倉庫番に見つかったが、その人は軍曹であつた。「貴様等どこの兵隊か！」と言いながら **40 どやしつけた**。その後、軍曹は笑いながら「そんなに腹がへるか」と言う。「貴様等は馬の食料を横取りしたら、馬が腹がへるぞ」と言った。「こっちへ来い」と薄ぐらい所へ連れて行かれた。これはえらいことになった、と思った。そこは小さな事務所らしい所であつた。上等兵と一等兵が机に座っていた。軍曹は「鼠(ネズミ)を捕まえた」と言っていた。私達は飯盒に盗んだまま立っていると、「食いたいか」と言うので、「もう食いたくありません(もうよい)」と言えば「遠慮するな」と言って、事務所横の空いた所で火を焚くのを許した。そこで**飯盒に、とうもろこしを入れて煎った**。我々は、どんな酷い目に遭うかと、おろおろするばかりであつた。そこで軍曹等は、私達に「食え」と言う。恐る恐る私達は食う。**41 内地のことを色々聞く**。皆、内地のことが気になるらしい。軍曹が、優しかったのは内地のことが聞きたかつたためであつたのであろう。**煙草を一本づゝ吸わせてくれた**。

## 考察

- 39 馬の食料を盗むぐらい腹が減っていたのか。捕まえた上官も、腹が減るであろうことは感じているようである。最初は**どやしつけ**られたが、許可されトウモロコシを飯盒で煎って食べる姿にタバコを吸わせて、内地の状況を聞いたりして本来は優しい人がのぞいている。
- 40 軍隊の常套手段の暴力の表現に「**どやしつけた**」「**殴打された**」「**ビンタ**」「**気合を入れた**」がある。
- 41 内地の銃後生活がどうなのか、残してきた親や子・兄弟などが気になるのは当然である。

我々の大隊は右田隊と言って、隊長はだいぶん、**42 歳**がいっていたように見えた。大尉である。この大尉も**召集されたのかも知れない**。全員の**總具**(T・装具か)検査が始まった。その後、今まで着てきた**43 防寒具等**は夏服と交換した。新たに、カンパン等が支給された。T・「**など**」は必ず「等」の漢字を使っている。隊長は、「我々の行き先は**44 汕頭**(スワトウ)である」と言った。「スワトウというこんな◇(T・山のような字の誤字)が南方のどの辺にあるか」と、皆、言いながら自分の**總具**(T・装具か)の点検に余念がない。聞いた話によれば**輸送指官**(T・**指官**は「士官」か「指揮官」か)でも、目的地に着くまでは絶えず、無電で動かされているから分らないのだという。

我々は夜中に港に向つた。**45 真冬の一月、二月に夏服**であるから、たまらなく冷たい。日本のように風がな



いので冷たい感じが先に立つ。

## 考察

- 42 筆者がこのように感じたのは、年配であり、最終的に人的資源が足りなくて召集され尽くす状態を知っていたからだろうか。最終的に召集された人たちはどんな人だったか知りたい。学生、先生、家の跡取り、学者などだったのだろうか。
- 43 真冬に夏服になったのは南方の台湾南端の高雄（カオシュン）と同じ緯度のスワトウ（今はシャントウ）に向かうからか。上海では冬の寒さは相当であろう。冬の出水は北風の寒さ、大口は深々とした寒さ、ここは大口の寒さについて近いようだ。
- 44 筆者たちの山砲隊を輸送する指揮官も無電で動かされているという状況は、味方から漏れることを恐れるからか。一行は装具点検ばかりのようだ。
- 45 前記の 10 では、天の寒さを「風がないので寒いとは思わなかった」という表現がある。筆者が **上海から仙頭に向かう頃の 1944 年 1 月は下記のような戦況** であり、連合軍側の反攻が見え始めている。日本では思想弾圧。
- 1 月 2 日・米軍がニューギニア島のグンビ岬へ上陸
  - 1 月 7 日・大本営が **インパール作戦** を認可
  - 1 月 14 日・ソ連軍が **レニングラード** とノヴゴロドで攻勢を開始
  - 1 月 26 日・東京・名古屋で初の疎開命令（建物の強制取壊し）
  - 1 月 27 日・ソ連軍が **レニングラード市** を解放
  - 1 月 29 日「中央公論」改題の編集者が検挙される（**横浜事件**）
  - 1 月 31 日・米軍がマーシャル諸島クエゼリン環礁に上陸

46 飯田棧橋から船に乗った。五六千噸ぐらいあろうか。私達は 47 一番底に押し込められた。下から見ると、四・五階ぐらいの高さに見えた。各階ごとに蚕棚になっており、立つことが出来ない。自分の 48 總具（T・装具か）、小銃、帯剣、鉄兜、防毒面、雑嚢（ザツノウ）、背嚢、防火面、防暑帽、水筒等、限りなくあり、これだけの物を持っているのである。一つの棚に四人ずつ入った。どの部屋も梯子段がついていて、そこから昇下する。我々四人は中に坐って世間話に花を咲かせる。時にはカンパン等を食う。我々の所には下士官の姿は見えなかった。49 將校・下士官等は甲板近くにおるといふ。抜け目がない。船が、やられたら我々は上にあがりきらぬ中に沈んでしまう。二・三回、退船準備の訓練があった。浮袋の代わりに、竹を前後に編んだ代用品を貰っていたので、それを身に付けて小銃、帯剣、カンパン持って甲板上に出るのであるが、船の中は幅一米足らずの梯子段であるので、一人ぐらいしか出られない所に、いっぺんに出ようとするから、尚、出られない。「魚雷にやられたら小銃なんか持って海に飛び込めるか」と、皆、言っている。50 食物だけは離さない。これが本当である。

## 考察

- 46 上海に「飯田棧橋」なるものがあつたのか不詳。「釜山に上陸してからは南京まで」ずーっと鉄道、「上海→汕頭」は船で移動。
- 47-49 階級による差別的待遇は船に限らずあらゆる場面で見られる。
- 48 兵隊一人の装具は大変なものであることが分かる。これだけのものを背負ったり肩や腰付近に付けている。下の船室からの脱出は大変だろうと思われる。上官は甲板付近にいてすぐに脱出できる位置のようだ。兵卒たちは浮袋も代表品の竹製品。

50 ここでも食料にこだわる姿。

51 船は六隻ぐらいで速力を速めたり、落したりしながら進み、駆逐艦が、前になり後になりしながら、いつの間にかいなくなったり、又、突然、現れたり、時々、飛行機が旋回しながら、どこかへ飛び去ってしまう。また、船はバラバラになり、他の船はどこにも見えない時もあったりして、島影等、見えない海の上を何日も進む。私達は気の合った者同士で、大方、甲板に出ておった。初めの頃は船酔いもあったが、すぐに慣れて来た。

52 南に進むにつれ、段々、暖かくなって来る。ちょうど 53 夕食時に退船命令が出た。私達は慌てながら飯だけは、食らい込んだ、船は前後に揺れながら、砲を打つ音がする。「潜水艦だ」と言っている。私も無我夢中であつた。ようやく甲板に出たら盛んに砲を打っていた。私達はただそれを眺めていた。何もすることがない。私は船が、まだ、やられていないから珍しさが先にたつて怖ろしいとは思わなかつた。潜水艦は去つたという。そんな中で、私は、なぜか半分は船旅を楽しんでいた。後から飛行機が来て、大きく、また、小さく低空で旋回して、いつの間にか見えなかつたが、気がついて見たら駆逐艦も来ていた。船から砲を打っている時には、なぜか駆逐艦はどこにも見えなかつた。海の上での戦いとは、我々には手も足も出ない。ただ船まかせである。その晩は興奮して余り眠れなかつた。我々は寢床で起きて、夜中でもカンパンやカツヲ節等を喰いながら、色々、話に耽る。

### 考察

51 6隻の船団を組んで、兵隊や馬や山砲などの兵器を南方へ輸送している状態、南方戦はアメリカの反攻で激しさを増している。悪名高いインパール作戦が、このころ認可されている。輸送船団には駆逐艦や飛行機が護衛に当たっている様子、船中の兵たちは「船任せ」で戦うことはできず、「船旅を楽しむ」というのは無事に帰還してからの感覚であろう、「飯だけは」とか「カンパン、カツヲ節」など食への記述も欠かせない。

52 上海で寒さを感じ、南下しつつ船中でも暖かさを感じている。亜熱帯に近づいている。

53 退船命令は潜水艦にやられるのを想定してにおことか、海上での退船とはボートなどで船から離れる意味だろう。「砲を盛んに打っている」という敵の潜水艦との応戦場面が書かれている。潜水艦は逃げ去つたのだろうか。

朝、甲板に出たら陸が見えていた。54 中国の山々や家等も、かすかに見えていた。船は止まっているのである。漁舟等は、どこにも見えない。船はいつの間にか動いていた。船は陸から離れたり、また、近づいたりしながら走っている。夕方、陸地に段々と近づいて行った。熱帯地方に来たという感じである。海辺には、ビロー樹等が一行に並んで生えている。55 汕頭、だという。私達は名前等は余り知られていない南の島と思ひ込んでいた。後で、ここは中国の広東省のスワトオという港町の名前だという。ややこしい名前であつた。船は港に着いた。上陸する時に船から盛んに空に機関砲を打っている。敵の飛行機が来たかと思つたが、何も音がしない。我々の話し聲で聞えないのか。夜空に曳光弾が花火のように美しい。

### 考察

54 船団は江戸時代でいえば「沖乗り」ではなく、「地乗り」の航海で、陸地に近づいたり離れたりして航海しているのは、潜水艦対策なのだろうか。段々と暑い感じの南へ下り、ビローなどの亜熱帯的景観の中に汕頭に着いている。

55 汕頭は台湾の台南の真西の大陸にある。上陸の時に機関砲が連射されたのは敵機が来たからか、それとも単なる威嚇射撃だったか不明である。

部隊は 56 汕頭の街の大道に出た。この道も舗装されていた。道路と、平行して、もう一段、上の方に道がある。變に思ったら元鉄道の跡で線路は外されていた。街の様子は、あっち、こっちで火 (T・灯?) が見えているだけで、余り分からない。大分、歩かされた。闇の中に際立って目立つ大きな建物が見えた。ここに我々は入って行った。ここが宿舎である。ここで、我々は色々注意を受けた。このあたりは和平地区であるが、安全ではないという。「絶対に単独行動は取るな」と言う。この近くには、特に便衣 (ゲリラ)が出るとのこと。我々の宿舎は、四方を低い塀に囲まれており、塀の外側から少年 (ショハイ)が、手に色々な食料等を上に加え、我々に交換を求めている。小さな汚れた手さげ籠に、無造作に入れてある。衛生的に余り良いとはいえない。こんな風景は上海では見たこともなかった。物々交換は、我々と、これからなくてはならない関係になる。

## 考察

56 汕頭の大通りは舗装、筆者が住んでいた南の穎娃町では舗装などなかったから、感心したように何回か舗装のことが出てくる。昭和 30 年代頃まで舗装のない道が日本では普通だった。歩かされて大きな建物の宿舎に。前もって、上海でも汕頭でも宿舎の取得に出かけている人がいることになる。交渉は平和裏に行われたか軍国主義独特の武力威嚇によるものだったか、などと考えた。ネット=便衣兵 (べんいへい)とは、一般市民と同じ私服・民族服などを着用して民間人に偽装して、各種敵対行為をする軍人のこと。便衣という言葉を知った。ゲリラの様子を「自在にその場にあった服装に装う」という「便利な衣類」という意味の字に私には見ええる。中国は侵略者日本に抵抗を続けている姿が垣間見える。戦争状態の政治とは別に、少年が交換に来る姿、一般民衆はいつでも平和的である。

汕頭の港に使役に行った。57 何をしたか忘れたが (T・このような記述が、後に書かれた証である)、多分、船から荷上げされた物を取りに行ったのだと思う。岸壁に何十となく、58 アンペラを被せた物が異様に感じた。皆で見に行くと、これは水死体であった。我々より一足先に上海を出た先発隊が潜水艦にやられたのだという。私達は運命を感じた。

## 考察

57 これは日付のない日記であるが、当時の記録であれば忘れることはないから、これも後日書いた証拠。  
58 先発の船が敵の潜水艦ににやられた犠牲者が、無造作に岸壁にアンペラを被せてある状態、戦時中とはいえ痛々しい。筆者の船も潜水艦に出会っている状況は前に書いている。アンペラとはポルトガル語の ampero またはマレー語の ampela で「カヤツリグサ科の多年草。湿地に生え、高さ 0.5~2 メートル。葉は退化して鱗片 (りんぺん) 状。茎の繊維は強く、むしろの材料にする。熱帯地方の原産で、中国南部などで栽培する植物であるが、ここではその茎を打って編んだ蓆を意味している。

この街も小さな洋館建てが港寄りに建ち並んでいた。59 我々は町の中に入っていったことがなかった。外側を通るだけであった。宿舎も町から、大分、離れていた。家の近くにはパイヤ等、わけの分からない植物も生えていた。私の 60 記憶も、おぼろげであるので、前後になったりする。我々は、ここでも演習をした覚えがない。ただ、61 衛兵勤務についてだけである。私が望楼で、夜、歩哨についている時、何やら下の方で物音がしたので、誰何 (スイカ)したが、二回したのに返事がないので、小銃で撃つ構えになった時、「待て、俺だ」という返事がしたのと同時に巡察将校が出て来た。三回目で撃たなければならない。将校は「早くから、ここで、ごそしていた」と言っている、私の気が付くのが遅かったので「眠っていた」と言う。「敵であったなら、貴様は撃たれていたのだ」と言いながら、私に気合を入れた。私は眠っていないようでも眠ったことは確か

である。衛兵交替後、私は衛兵司令に、大分、殴られた。後で聞いた話では、この將校は意地悪で、時々、こんな嫌がらせをするのだという。私だけではないというのである。「あの將校は、いつかは打たれるぞ」という。

## 考察

59 汕頭では宿舎も町から離れ、兵隊も街の中には入っていない。上海のように街中で饅頭屋に入ったりするようなことはないようで、南に行くほど反日感情が高まり、便衣の出没を警戒しているようである。

60 これも後から書いた証拠である。文章が間違ったり前後しているような感触はない。

61 本来の山砲隊の演習はしていないが、衛兵勤務に就いている。歩哨を試すような將校とのやり取りが面白い。どちらが正しいかは不詳。ここでも暴力表現の「気合を入れた」や「殴られた」が出てくる。將校が意地悪だったか、軍人として真面目過ぎたのかは不明だが、「打たれるぞ」は我々の高校時代にも聞いた。「打つ側が相手の身として表現するもの」だった。

朝からかんかん照りが続く中、空には 62 白黒ガラスが鳴くのが印象的であった。我が部隊は十キロぐらいの所に移動した。ここは恵来という所で部隊は 63 中隊ごとに別れ、部落を兵舎とした。部落には、人は誰もおらず部落全体は 64 高い堀に囲まれて四角い中にあり、角の方に高い望楼が一つ立っている。家と家とは、全部、向合せて通路は石畳である。65 家の中は土レンガで出来ていて、窓は一つあるか、ないかで、中は暗く、土間の奥に寝台があり、その下にはカメ壺が横に並んで置いてある。土間の左横にカマドがあり、ここで炊事等をし、土間で椅子に腰掛けたり、または座ったりして食事をする。時には豚と一緒にする家もある。私が見た所は、大概、こんな所が多かった。農村地帯の貧しい村々であったのかも知れない。中国の町や村は全体的に堀に囲まれ、高い望楼が各所にある。そして全部、通路は石畳が敷いてある。

62 白黒カラスはカササギのことらしい？。佐賀県ではカチガラスほかの呼び方があるようだ。

63 旧日本軍の中隊の定員 明治 23 年 11 月 1 日制定時の「陸軍定員令」によると、当時の各兵科の連隊及び大隊における中隊の平時定員は次の通りであった。歩兵：136 名 騎兵：159 名 野戦砲兵・近衛砲兵：111 名 要塞砲兵：134 名 工兵・近衛砲兵：126 名 輜重兵：290 名（輸卒を除くと 110 名） 近衛輜重兵：220 名（輸卒を除くと 100 名）。自衛隊では 30～40 名程度と出ている。66 に解説。

64 道路について「舗装」とか「石畳」とか書いて関心を示している。内地が未舗装であったから、印象に残ったのであろう。堀で囲まれ望楼があるのは城郭都市の形態で防御を目的とする集落形態と思われる。環濠集落 周囲に堀めぐらせた集落（ムラ）のこと。水稻農耕とともに大陸からもたらされた新しい集落の境界施設と考えられている。水堀をめぐらせた場合に環濠と書き、空堀をめぐらせた場合に環壕と書いて区別することがある。ルーツ 「環濠」と「環壕」のルーツはそれぞれ、長江中流域と南モンゴル（興隆窪文化）であると考えられており、日本列島では、弥生時代と中世にかけて各地で作られた。長江中流域では、今から約 8000 年前の環濠集落が、湖南省のリーヤン平原にある彭頭山遺跡で発見されている。この環濠集落の直径が約 200 メートルで、西側が自然河川に繋がっており、北側と東側、南側には、幅約 20 メートルの濠が巡っているらしい。十分な発掘調査はまだであるが、水田稲作農耕の遺跡である。内蒙古自治区赤峰市にある興隆窪遺跡から、約 8200～7400 年前の環濠集落が見つかっている。この集落は、長軸 183 メートル、短軸 166 メートルの平面形が楕円形に巡る溝によって囲まれている。溝の幅は約 1.5～2 メートルあり、深さは約 1 メートルほどである。環濠の内側から約 100 棟の堅穴式住居が発見されている。この集落の生業はアワなどを栽培する畑作農業である。

我々、中隊は、この部落から、時々、66 小隊、または、分隊毎に方々に引っ張り回される。時には、我々が

村の中を小人数であるのは、余り気持よいものではない。私達が村に入る時は、67 年寄や子供だけがおるのに、若い人々が見えなく、特に若い娘等は、全然、見当たらない。時々、若い男の人が家の蔭をすーと横切る。我々をどこかで、じっと見つめているいるのだという。一軒の家に入った時、68 さつまいもが蒸してあった。外から婆さんが見て何か盛んに言っているが、我々には、さっぱり分らないので、鍋のさつまいもを喰いながら、そこらあたりを見回し、出る時、また、芋を持って出ると、また、騒ぎ出す、仕方がないので、頭を一つどやして出た。婆さんは、ぶつぶつ言っていた。

## 考察

◎構成は師団 6000～2 万—旅団 1500～6000—聯隊 1000—大隊—中隊 200—小隊 30～40—分隊・班 10

### 66 各隊の人数

**分隊・班** (自衛隊において)、最も小さな組織が分隊または班、概ね 10 名前後。

**小隊** 分隊が 3 つまたは 4 つ集まることで編成、人数は概ね 30 名～40 名。

**中隊** 歩兵なら 200 人程度、中隊こそが軍隊の中で最も基本的な組織単位。

**大隊** 連隊と中隊の中間

**連隊** 概ね 1000 人前後

**旅団** 師団よりも小さく、連隊と同等又はこれよりも大きい単位で、1,500 名から 6,000 名程度

**師団** (仏・英: Division) は、軍隊の部隊編制単位の一つ。旅団・団より大きく、軍団・軍より小さい。師団は、主たる**作戦単位**であるとともに、地域的または期間的に独立して、一正面の作戦を遂行する能力を保有する最小の戦略単位とされることが多い。多くの陸軍では、いくつかの旅団・団または連隊を含み、いくつかの師団が集まって軍団・軍等を構成する。編制については、国や時期、兵科によって変動が大きい。21 世紀初頭現代の各国陸軍の師団は、2～4 個連隊または旅団を基幹として、歩兵、砲兵、工兵等の戦闘兵科及び兵站等の後方支援部隊などの諸兵科を連合した**6 千人から 2 万人程度**の兵員規模の作戦基本部隊である。

67 年寄か子供以外は、隠れているか避難しているか、日本軍を警戒している様子である。筆者が興味あるらしい「若い娘」とか「クーニャン」のことを特に書いているが、それが全く見られないようである。若い男性は見え隠れして日本軍を監視しているような描写である。

68 サツマイモと、それを食われた婆さんとのやり取りが面白い。

中国の女の人は、年寄から子供まで、皆、69 耳飾りと腕飾りをし、腕輪は一つか二つしていた。年寄の耳輪は永年の耳輪の重みで、耳の穴が大きくなり、異様に感じた。ここらの炊事鍋は大きな 70 平鍋で日本の平鍋より、うんと薄く触ると、べかべかする。ここらの家には家財道具は何もなく、ただ寝る所と炊事場だけである。あとは何も見たこともなかった。ただ、やたらに 71 小さな豚とニワトリ、アヒルが目につく。

我々が行く所の村にも畠にも、どこも余り 72 若者が姿を見せない。ただ、時々、町か、どこかに野菜等を籠に入れて担いだ人々が二、三通るだけで、我々に笑顔で挨拶して通る。籠を担いだ棒は先方が尖って槍になっている。何かあった時には**武器になる**という。(T・私の故郷の出水市今釜の「ヤマコ」と言われるものと同じだが、それは稲束や藁束を両方に突きさして担いで運ぶためのもので武器的な意味は全くない)。先に書いた 73「芋」であるが日本では馬や牛に喰わせるような、小さな屑芋ばかりで、大きいのは何もなかった。私達が行く所に大きいものはどこにもなく、畠を掘って見たが土が固く小さいもだけであった。ここらの畠は痩せて大きくならないのかも知れない。

## 考察

69 耳輪については民俗学的報告があるようだ。この観察は貴重だ。世界 古代では**装飾**や**呪術**(じゅじゅつ)、あるいは**地位の象徴**として用いられた。『旧約聖書』やギリシア神話のなかにもイヤリングの記述。中世には、パールをかぶる習慣から一般に衰退。16世紀になるとふたたびイヤリングは盛んに、バロック時代には**男性にも広く愛好**された。これまでのピアス式に加えて、17世紀にはクリップ式やねじ留め式のものが考案。18世紀は真珠の大流行をみた時代であるが、当然イヤリングにも反映している。18世紀末にはダイヤモンドに加えてサファイアやエメラルド、19世紀初頭にはふたたびカメオ(宝石や貝殻や象牙などに浮彫りをした細工)をあしらったものが登場し、ブローチやブレスレットなどとペアになったデザインはこのころから。19世紀の後半、一時下火になっていた流行に再度火がつく。常時つけることは少なく。20世紀になって、断髪の流れを反映して、宝石もの(第一次世界大戦後は模造宝石のもの)が愛好、**広く一般化したのは第二次世界大戦後**。

70 平鍋の観察「べかべか」はいい表現。

71 中国の農家の家畜や家禽の状況、終戦前後の日本の農家も似ている。

72 ここでも若者の記述。野菜売りの青年の観察、日本軍への挨拶の意味は？

73 芋の観察、先にも出て来たが出征前の故郷、南薩でもおらく芋食だったのであろう。大きくない芋に関心を持ち原因を述べている。

こんなような日々が続く。74 時には思い出したように演習がある。兵舎に歸れば、75 **被服、兵器検査等**が毎日のようにあり、よく76 **飯盒の蓋、または、中盒等の数が合わなかったり**で、そのたび、**ビンタ**を喰う。そのため、**よその班から出来るだけ多く盗る**のである。盗る時は井戸に各班が集まって食器を洗う時を狙う。各班は、盗られないように、丸くなり、監視しながら洗う。よそから**盗った時は、鬼の首でも取ったような気分**になる。飯盒がなくなって井戸に飛び込んで死んだ人もいるという。余程、気の小さい人であつたらう。数より**多く盗った時には、私も中盒を背囊の中に隠して、仲間が盗られた時に出すように持っていた**。そのため、皆、**盗みが上手くなる**。盗られた人は、また、**検査の時、ビンタを喰う**のである。**盗って来たら上官に褒められる**。

74 演習の内容が書いてないのは残念だ。前線に着いた時のために訓練は定期的に「思い出したように」なされていたのか。

75 被服検査と兵器検査は軍隊ではつきものなのだろう。そして、暴力の原因でもあるような気がする。

76 私が持っていた飯盒は、軍隊用のものだったと思うが、おそらく長兄か調達したものを貰ったものだったのだろう。生徒とのキャンプには必ず持参した。蓋と中蓋は相似形ですんなり収まるようにできていて、一組の飯盒で、蓋・中合・本体と三つに使い分けて利用できた。中蓋を取って飯を炊き、最後に飯盒ごとひっくり返して蒸らしたが、あれも長兄が教えたのだろうか。ここでは日本軍の**形式主義的な一面**を見る思いがする。数をそろえる、盗んででも揃える、上官も同じ。足りないとお決まりの**ビンタ**。

夜の点呼後、消燈までに77 **草を焚き、蚊を追い出して蚊帳を張る**。草は晝の間に採って置くのである。**マラリヤにやられるから、時々、「キニネ」という薬をくれる、小さな黄色い苦い薬**である。それでも、毎日二、三人の熱発患者が出る。時々、78 **煙草、甘味品等の配給**があり、これらは、皆、**中国製**である。

食事は、大概、79 **水牛肉にエンサイ**(ホーレン草に似た野菜)で、水牛肉は黒くて、油けのない、余り上等肉とはいえない。町におる時と、貧しい農村地帯とでは喰物が變ってくるので、我々は町に出たいが、我が隊は、いつも83 **農村地帯を、さ迷うだけ**である。**煙草等をくれる時には、いっぺんに、一人に二十、三十個もくれる時もあり、ない時には、とことんなく、一人に二十・三十個くれて持つのは、いつも部隊が移動する時**

である。

77 草を焚いた煙の後で蚊帳を吊って蚊の対策をしている。マラリヤがない現代の日本でも蚊は夏の厄介者である。私の喜入でも一年中網戸生活であるが、それでも毎日のようにどこからか侵入して、アレルギー体質のは神経質に騒いでいる。かつて東南アジアの地理の授業でキニーネを取り扱ったことがある。たしか効能は『解熱』だったような。

78 煙草が軍隊で話題になることは多い。先述の馬糧倉庫の窃盗の時にも上官が「吸わせてくれた」とあったし、恩賜の煙草という言葉もあり、出水ではそれを耕作す家庭の誉と収納する時の厳格さとお祭りのな表がんとあり、私は郷土誌でそれを挿入した記憶がある。軍隊での「すぎまじいストレス」にとって必要悪だったのだろうか。今ではあらゆる場所で嫌われる存在、たばこ農家も減り、たばこ産業は斜陽である。

79 エンサイと水牛の肉は日本にないから、初経験で特記したのだろう。水牛の肉は固いのが難点、エンサイは別名が多い。栄養価は法蓮草より高いが、難溶性のシュウ酸カルシウムを多く含み、えぐ味や尿道結石の可能性があり食べぎは要注意。

私は **80** 山砲聯隊に入隊したが、山砲に付いての教育は一つも受けなかった。時に演習はあったが歩兵演習と何ら變りなかった。 部隊に馬が數十頭いたが、その内、二十頭ばかり、我々は見習士官を長として、二、三十キロぐらいの所にある部隊まで連れて行った。その附近は、時々、**81** 便衣が出るから警戒が必要とのことで、輕機、小銃でかためた護衛がついたが何もなかった。

(T・4行ぐらいの空白)

晝の行軍の時、川にそって、車兩が幾台か続いて通っていた。川の兩岸は余り木の生えていなく、所々、僅かに猫柳が生えているだけで、川岸は砂で覆われ、道が続いていた。**82** 一台の車が川に転落した。 高さ五米ぐらいあろうか。馬が暴れるために、車はずりずりと落ちる。すぐ水に浸かってしまった。皆どうすることも出来ず、軍曹が「鳩が死んだ、鳩が死んだ」と、泣きながら、落た所を行ったり来たりして、我か子を死なしたような素振りであった。 この車に傳書鳩の箱を積んでいたとのことであった。

(T・「3分の1」頁ぐらいの空白)

(T・続いて「3分の2」頁ぐらいの空白)

我々は、**83** 行軍が余りに辛いので、逃亡しようかと思う時もある。 色々考えを廻ぐらしながら、夢を見ように、ただ歩く。第一、逃げる時、服装を変え、中国人を殺し、言葉が別らない時、唾の真似をする。 ここまで成功しても、その後、逃亡が分ると家族に迷惑がかかる。永久に国へ歸れない。ここまで来て思い止まる。

(T・この先もありそうだが?)

**80** 山砲隊入隊・山砲隊の訓練なし・歩兵練習、この三者は関係があるように思われる。最初は第6熊本師団の輜重、2回目が**臨時召集補充兵**として**熊本山砲連隊**である。2回目が本番である。しかも臨時召集補充兵として。兵員の不足を感じるから訓練は歩兵的なものが多かったのであろう。

**81** 便衣というゲリラを相当に警戒している様子が見える。

**82** 車の転落、伝書バトの災難、責任者の軍曹の嘆き、筆者もそれで伝書バトの存在に気付いた。

**83** 軍隊では「逃亡」や「自殺」が話題になるほどきつい状態であつや用で、逃亡した時のやり過ぎし方は、日頃、兵の中では共通理解していたことなのだろうか。「満州義勇軍の記録」の中にも、案内してくれた中国人を最後に殺したことが書いてあった。

旧日本軍の小隊 屯田歩兵：221名 **歩兵小隊** 歩兵中隊内の小隊は小銃分隊数個、軽機関銃分隊数個から成る。3小隊で中隊を編成する。歩兵機関銃中隊内の小隊は戦銃小隊と弾薬小隊とがあり、戦銃小隊は機関銃1丁を有する分隊2個から成り、弾薬小隊は3分隊から成る。戦銃2小隊、弾薬1小隊で機関銃中隊を編成する。歩兵砲隊内の小隊は歩兵砲1門を有する分隊2個および弾薬分隊から成り、3小隊で砲隊を編成する。**戦車小隊** 通常、砲戦車3両、銃戦車2両から成り、戦車隊の戦闘単位であり、小隊長の号令または命令によって動作を実行し得る。戦車中隊は数個の小隊および中隊段列から成る。**騎兵小隊** 騎兵中隊内の小隊は数個分隊から成り、4小隊で中隊を編成する。騎兵機関銃中隊内の小隊は歩兵機関銃中隊内の小隊の編成に準じる。**砲兵小隊** 砲兵中隊（野戦兵中隊、騎砲兵中隊、山砲兵中隊）内の小隊は、**砲車1門および弾薬車を有する分隊2個から成り、2小隊で中隊戦砲隊を編成**する。十五榴中隊戦砲隊は砲車小隊2個、弾薬小隊1個から成り、砲車小隊は砲車1門を有する分隊2個から成り、弾薬小隊は弾薬車4両から成る。十加中隊戦砲隊はこれに準じるが、弾薬小隊は弾薬車2両から成る。**工兵小隊** 歩兵中隊内の小隊の編成に準じるが、軽機関銃分隊無し。**輜重兵小隊** 輓（駄）馬分隊数個から成る。